

「みんなと仲良くする」子ではないけれど

川副 知佐

幼稚園教諭(滋賀県八日市市)

幼稚園に入園して1週間ほど過ぎた頃、よくこういう質問を親から受ける。「先生、うちの子みんなと遊んでいますか？」それから続々と、この類いの質問は続くのである。「誰と遊んだ？」と毎日尋ねるのに、ちっともお友達の名前を言わないのですけれど……」「一体いつになったら、お友達ができるのでしょうか」「うちの子は仲間はずれにされていませんか」親の心配は尽きないものである。しかし、私はこの質問に対して、親がすぐに安心するような答えは持ち合わせていない。結局、子どもの日常を伝えつつ、「大丈夫ですよ」というひとときの慰めを答えにする他ないのである。

5年前、私のクラスにM君という男の子がいた。彼は傷つきやすい自分自身を、他者へ暴言を吐くことで守っていた。当然のことながら、園のさまざまな行事の中で、クラスの友達、周囲の大人たちへと、自分の苛立った感情や不満を攻撃としてぶつけてきた。あえて言う、いわゆる「集団不適應の子ども」であった。園生活2年間で、彼は彼なりに集団の中に馴染み落ちていったが、画一的な「みんなと仲良く」する子どもにはならなかった。しかし、私やクラスの子どもたちは、彼とともにさまざまなことを学んだ。

11月のある日のことである。当時は皆で、自然観察も兼ねて毎日近くの川まで走っていた。農道とはいえ時には車が通るので、私が先頭になり子どもたちを2列に並べることにしていた。走り始めて数日たった頃、彼の怒りは朝皆が集まって話をしている時に爆発した。「怒り」という形での自己主張を、大人が持つ権力で黙らせることは可能かもしれない。しかし、ひとまず彼に尋ねてみることにした。「何故そんなに怒っているの？」

彼は幼く乱暴な言葉ではあったが、「先生ばかり先頭走って、ずるい！」と叫んだ。「じゃあ、M君が一番前を走りたいの？」と尋ねると、素直に大きくうなずいた。次に、このやりとりを聞いていたまわりの子にも尋ねてみた。「みんなも今M君が言ったみたいに、一番前で走りたい？」何人かの子たちはハッと我に返った表情で、「わたしも！」「はくも！！」と言いはじめた。安全や指導という私が持っていた枠組みと、M君だけでなく実は他の子たちの奥にも眠っていた「先頭を走りたい！」という欲求。この2つのバランスを再考していく必要性が問われたのである。数日をかけて、私を含めたクラス全員が順番に先頭を走ること、その順番の決め方、先頭に走った時に守ることなど、子どもと一緒にアイデアを出し合いながら決め、クラスに定着したのである。

彼の怒り、みんなと一緒にすることに従わない強烈な自己主張があったことで、新しいものが生まれたのである。そして原動力となった彼は、相変らず“自分の番がなかなか来ないこと”には腹を立てていたが、怒りながらも自分の番を心待ちにしていた。彼の怒りや不適應行動に対してまわりの子たちは、ある時はそのままに放ったらかし、ある時にはぶつかり合う。でも、その怒りも彼自身の一部なのだと受け入れた時、ありのままでM君がクラスの一員となった。

親が知らず知らずのうちに持たされてしまう「横並び思考」は、多様な中で鍛えられ、自分自身を磨くことや生まれてくる可能性、一人一人の個性を閉ざしていくものかもしれない。一定基準に子どもをあわせているだけでは見えてこない世界がある。